

理科だより

発行

平成21年10月30日

編集 RIKADAI SUKIMAN

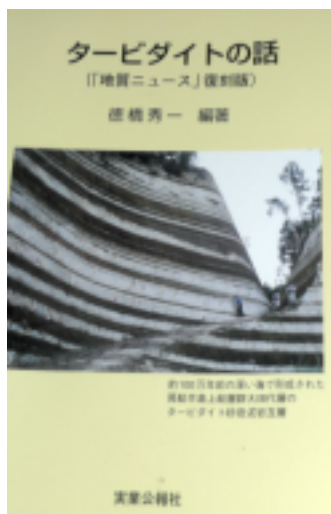
ラミナ (葉理)



上の写真のような地層に見られる模様をラミナと呼びます。水の流れた跡がつけた模様です。水の流れの化石みたいなものです。海の波がつけた模様の化石はリップルマークといえます。(下)

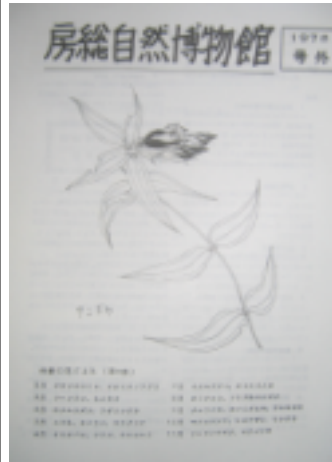


再びタービダイト



理科だよりV01. 41で紹介したタービダイトですが、参考資料を見

る機会がありました。タービダイトの語源があいまいだったのですが、定義がきちんと書いてあったので紹介します。「引用：みなさんはタービダイトということばをお聞きになったことがあるでしょうか。地質学や地球科学の分野で使われている専門用語ですが、プレートテクトニクスなどに比べると、一般の人にはあまりなじみのない、あるいはほとんど聞いたことがないことばかも知れませんが。タービダイトという言葉は適当な日本語訳がないために、英語の言葉が日本でもそのまま使われています。タービダイト (turbidite) とは、タービディティー・カレント (turbidity current) という流れによって運搬され堆積された堆積物という意味ですが、この流れのほうは、混濁流とか乱泥流という訳語が一般に使われています。したがって、タービダイトをあえて訳すと、混濁流堆積物や乱泥流堆積物ということになります。」清澄層で見たタービダイトですが、いつも気にしているといつか情報に出くわします。インターネットだけではなく、実際に見に行ったり、本で調べてみることも大切であると感じます。



房総自然博物館

1976年とありますから、今から34年前のものです。この号外は房総自然博物館設立の宣言という内容になっています。千葉県の手倉という所にあるとのこと。そのような博物館ってあったかな？と思ったので調べて見ると、もうそこはすでに廃墟になっているとのことでした。今は場所が変わって、NPO法人「房総自然博物館」〒299-1732千葉県富津市宇藤原316：峰上ステーションTEL&FAX 0439-68-1041だそうです。設立のときの意気込みが感じられるので、当時の号外に記載されている文章を紹介します。(ここで引用しておかないと、茶色に変色したただの一枚の紙なので、二度と目に触れることになりかねないと思うからです)「引用：千葉県は今、開発の波にあらわれている。東京湾の埋め立て、内陸

における工場、ゴルフ場の建設、土砂の採掘、ダムによる水没などにより、房総の自然は、土台から破壊され消滅させられようとしている。そして開発により、それまでは親しかった地域社会からも房総の自然は見捨てられてゆく。人間にかかわる公害は、人間自身が立ち上がり、それと闘うことができる。しかし、房総の自然は、無言のままに滅びようとしている。その自然を救いたいと思う。緑なす森と清らかな溪流の山、その房総の自然が要求する主張を聞こうと思う。今、ここに、房総自然博物館を設立する。房総の自然を研究し、理解し、そして、破壊されてゆく被害者としての房総の自然の代弁者、弁護者となりうる博物館として設立しようと思う。自然は、いまだに未知なるものに満ち溢れており、管理しきることはいわゆる不可能であろう。我々は、まず、自然に学ぼうと思う。その自然がどんな暮らしをしているのか、我々はなにを期待してもよいのか、そしてなににより、なにをしてはならないのかを学ばなければならない。その自然の無理解の上にたつ過大な資本の要求が、すべての自然破壊の原因なのだから。」何事も事はじめは良いのですが、継続することは難しいと思いました。後継者を育てることの難しさは、歴史が示す通りです。